

# 人造人間の秘密

海野十三

青空文庫



ドイツ軍襲来しゅうらい

「おい、起きろ。ドイツ軍だ！」

隣室りんしつのハンスのこえである。部屋の扉は、いまにも叩き割られそうである。

私は、自分でも、なんだかわけのわからない奇声きせいを発して、とび起きた。

扉は、めりめりと、こわれはじめた。

「もしもし、今、扉を叩きこわしていられるのは、ドイツ軍のお方ですか」

私は、いそいでズボンをはきながら、入口の方へ、こえをかけた。

「おどけたことをいうな。この際に、ひとをからかうもんじやない」

ハンスは、扉をこわすのをやめて、裂け目の向こうで、ふうふうと息をついている。夜光時計やこうどけいをみると、ちょうど午前三時であつた。

「おい、ハンス。これから、どうするつもりか」

「すぐフランス国境へ逃げださないと、もう間にあわないぞ、手て取り早く、用意をしろ。——おい、早くここをあけないか」

「なんだ。あんなに大きな音をたてながら、まだ扉はあいてない

のか」

「よけいなことは、一口もいうな」

ハンスは怒っている。

私は、ちゃんと服を着てしまったので、扉の鍵に手をかけた。

とたんに、それがきつかけでもあるかのように、戸外で、だだだだだん、だだだだんと、はげしい銃声がきこえた。

「あつ、機関銃の音だ！ さては、市街戦が始まったんだな」

鍵をまわすのと、ハンスが室内へころげこんでくると、同時に、同時  
だった。

「今のを聞いたか。ドイツの落下傘部隊だ！」

「えっ、そんなものが、やってきたか」

私は、ドイツ軍の大胆さと徹底ぶりとから、大きな感動をうけた。

「おい、千吉せんきち。早くしろ、早くしろ。例のものを、持ち出すんだ」

「例のもの？」

「ほら、例のものだ。モール博士から預けられた例の密封みつふうした二本の黒い筒つつを持ちだすのだ」

「うん、あれか。あんなものを持って逃げなければならぬか」  
「もちろんだ。われわれ二人の門下生は、特に博士から頼まれてるのだ。博士の信頼をうら切つてはならない」

モール博士というのは、このベルギー国のモール科学研究所の

所長で、私もハンスも、この門下生だった。博士は、ちようどドイツ軍がオランダに侵入したことが放送された直後、われわれ二人をよんで、その二つの黒い筒を預けたのだった。

——非常の際には、君たちは、何をおいても、これを一本ずつ背負って逃げてくれ。そして世界大戦が鎮しずまって、わしが再び世にあらわれるまでは、それを各自が、ちゃんと保管していてくれ。もちろん、その密封を破ることはならない。もし、万一この筒を捨てなければならぬときが来たら、底のところから出ている導火線に火をつけるんだ。だが、いよいよもういけないというときでなければ、火をつけてはならない。わかったね。——

モール博士は、長さ三十センチほどの、なんの印もついていな

い黒い筒を二本、二人の前に並べたのであった。

——博士、一体この筒の中には、なにが入っているのですか。いや、もちろん、それは秘密なんでしょうが、お預りする以上、その中身のことがいくらか解っていないと、保管するにしても、持ちはこぶにしても、用心の仕方がありますからね——

と、これは、私がいったのである。すると博士は、怒ったような顔になって、しばらく呻うなっていたが、やがて強しいて自分の気分をほぐすように、広い額をとんとんと叩き、

——なるほど、そういわれると、君たちのいうことは尤もつともだとおもう。ではいうが、これは絶対に他人に洩もらしてはならない。じつはこの二本の黒い筒の中には、わしが生命をかけて完成した



或る兵——いや、或る器械の研究論文が入っているのだ。ここへ書いて置いては、焼けてしまふか、失つてしまふかだ。だから、君たち二人に委まかして、いざというときには、持つてにげてもらおうとおもう。殊ことに、これがドイツ側の手にわたることを、わしは、極端にきらいかつ恐れる。そういうことがあれば、天地が、ひっくりかえる。すべてがおしまいになる！

博士は、蒼あおい顔をしていった。

——博士。なぜドイツ側の手に入ると、万ばんじ事がおしまいになるのですか。一体、どんなことが起るのですか——

と、私は、博士のおもっていることを、もつとはつきりしたいと考え、追ついきゆう窮ゆうした。

——それ以上、いえない。なんといつても、いえない。——  
 そういったきり、博士は、頑がんとして、そのあとのことを喋しゃべろう  
 とはしなかったのだ。

ぐわーン。がらがらがらがら。

家が、大地震のように鳴動めいどうした。迫撃砲弾はくげきほうだんが、この建物  
 に命中したらしい。もう猶予ゆうよはならない。

「おい、ハンス。もう駄目だ。逃げよう」

と、私は友を呼んだが、そのときハンスは、黒い筒の一本を抱  
 えたまま、ものもいわず、二階の窓から外へとびおりた。

ニーナのこえ

それ以来、私はハンスと、別れ別れになつてしまった。

私も、自分に預けられた一本の黒い筒を小わきにかかえて、階段を下り、裏口から戸外にとびだした。そのときは、空はまっくらであつたが、銃声と反対の方へ逃げだして、五分ぐらいたつて、後をふりかえると、私たちのすんでいた町は、三ヶ所からはげしい火の手が起つていた。

砲声は、しきりに、夜の天地をふるわせている。気がつくと、頭上を、曳光弾えいこうだんが、ひゅーんと、気味のわるい音をたてながら、通り越して行く。しかもこれから私が逃げようという方角へ、その曳光弾えいこうだんはとんでいきつつあることを知ると、さすがの私も、

足がすくんでしまうように感じた。

「これは、いけない。ぐずぐずしていると、ドイツ兵にみつかつてしまうぞ」

日本人である私が、ドイツ兵に見つかつても、友<sup>ゆうほう</sup>邦のよしみをもつて、大したことがないらしくおもわれるであろうが、今の私の場合は、そうはいかなかつた。というのは、当時私たち日本人は、ことごとく、ベルギー国から引揚げてしまつたことになつていたので。私は、或る事情のため、極秘にこの土地にのこつていたので。だから、もしドイツ兵に見つかれば、有<sup>うむ</sup>無をいわず、敵<sup>てきせい</sup>性ある市民、あるいはスパイとして殺されてしまうであろう。殊<sup>こと</sup>にモール博士から託<sup>たく</sup>されたこの黒い筒などをもつていることな

どが発見されれば、さらにいいことはない。

「困った。これは、うまく逃げられそうもなくなったぞ」

私は、乾いて、やけつくような咽喉の痛みを感じながら、ぜいぜい息を切つて、雑草に蔽おほわれた間道かんどうを走つた。走つたというよりは、匍はいながら駈かけだしたのであつた。頼む目標は、イルシだんきゆう段丘とちのうえに点つている航空灯台が、只一つの目当てだつた。

その夜、イルシ段丘の灯火が、ドイツ軍の侵入をむかえて、いつものとおり消灯もされずに点ついていたことは、全くふしぎなことでもあつた。だが、そのとき私は、こう思つた。

「ふん、ドイツ軍のスパイがやつた仕事だな。それにちがいない」

私は、それ以上、うたがいもせず、どんどんと、灯台の灯を

目がけて、前進した。足をとられてごろんごろんと転がること数十回、数百回。これでも私は、すぐ跳ねおきて、イルシ航空灯台の灯を目あてに、次の前進をつづけるのだった。

こうして、くるしい前進をつづけ、時間は、はっきり分らないが、約一時間以上かかって、私はようやく、上り坂になった段丘にたどりついたのであった。

砲声や銃声は、ひっきりなしに、鼓膜こまくをうち、脚にひびいてくるが、幸いにも、この段丘附近は、しずまりかえっていた。私は、ほっと、息をついた。ここまで来て、どうやら、戦闘の渦の中から、うまく外れるはずことができたように感じたからである。私は、にわかに、たえ切れないほどの疲労をおぼえて、そのまま段丘の

斜<sup>しゃ</sup>面<sup>めん</sup>に、うつ伏<sup>ぶ</sup>してしまった。

それから、どれほどの時間が流れたのか、私は、全くおぼえていない。

私は、しきりに、算術の問題をとこうとして、くるしんでいる夢をみていた。

そのとき、私は、誰かに呼ばれているような気がした。

「千吉、千吉！」

ほう、私の名を呼んでいる。

（誰？ お母アさん！）

「千吉、千吉！」

私は、はっと正<sup>しょう</sup>気<sup>き</sup>に戻った。

「千吉、千吉！」

私は、その場に、とび起きようとした。

「し、静かにして……」

その声が、私の耳もとに、ささやいた。そして、私の両肩は、下におしつけられたのであった。

電灯が、点<sup>つ</sup>いている。そして私は、ふんわりした藁<sup>わら</sup>のうえに寝ている。

「おや。君は、ニーナじゃないか」

私は、目をみはった。私の傍<sup>そば</sup>についていたのは、ニーナといって、私たちの住んでいたアパートの娘だった。彼女は、小学校の六年生だった。私は、ふしぎな気持になった。私は、ドイツ軍の



侵入の夢をみながら、アパートで睡ねむっていたのではなからうか。

いや、違う。アパートには、こんな妙な室はなかった。ここの部屋ときたら、まるで工場の物置みtaiである。

「あたし、ニーナよ。でも、千吉、うまく気がついてくれて、よかったわね。あたし、千吉はもう、死んでしまうのかと思ったのよ。だって、あたしが見つけたときは、千吉は、青い顔をして倒れているし、上衣は血まみれだし、シャツの腕からは、傷口が見えるし……」

「傷？」

私は、そのとき始めて、脈をうったびに、左腕がずきんずきんと痛むのに気がついた。

「あつ、左腕をやられていたのか」

腕には、誰がしてくれたのか、ちゃんと繃帯ほうたいがまいてあつた。そのとき私は、たいへんなことを思いだした。左手でわきの下に、しっかりと抱かかえていた例の黒い筒は、どうしたのだろうか。どこへいってしまつたのだろうか。

### 怪あやしい設計図

私が、きよろきよろとあたりを見廻すものだから、ニーナはそれと気がついたらしい。

「どうしたの、千吉」

「大切な品物だ。私は黒い筒つつをもっていったんだが、ニーナはそれを見なかったかね」

ニーナは、にっこり笑った。

「黒い筒ならちやんとあるわ」

「どこに？」

「千吉の寝ている藁わらの下にあるわ」

「えっ、ほんとうか」

私は、むりやりに起きあがった。そして藁の下に手をいれようとしたが、左腕を傷ついている私には、ちと無理だった。ニーナは、それをみると、自分の手を入れて、黒い筒を引張りひっぱだした。

「これでしょう？」

私は、うれしかった。正しく、それは、モール博士から預かった黒い筒だった。私は、それを右手にとって、筒をよく改めしてみた。ところが、私は、筒のうえに、異変のあるのを発見しておどろいた。

「あつ、開けてある。誰が、この筒を開けたのだろうか」  
その筒のうえに、嚴重に封をしてあつたのに、その封緘ふうかんが二つにひきさかれ、そして筒には開いたあとがついている。

私は、ニーナをにらんだ。

「ニーナ。君だね、これを開けたのは」

ニーナは、首を左右にふった。

「でも、君でなければ、誰がこれを開くのだろうか」

そういいながらも、私は、筒の中にどんなものが入っているか、それを早く見たくて、ならなかった。だから私は筒の一方を、両り  
ようあし脚の間に挟はさむと、他方の端はしを右手にもって、引張った。

筒は、苦もなく、すぼんと音がして、開いた。私は、胸をおどらせながら、筒の中をのぞきこんだ。

すると、筒の中には、十五六枚の紙が、重ねられたまま巻いて入っていた。私は、早さっそく速これを引張りだして、ひろげてみた。青写真だった。こまかく描いた、器械の設計図であった。急いで、一枚一枚、繰くっていくうちに、私は、その青写真が、どんな器械をあらわしているかについて、知ることが出来た。

「おお、これは人じんぞうにんげん造人間の設計図だ！」

私は、おどろきのこえをあげた。

人造人間！ モール博士が、人造人間の研究をしていたことを知ったのは、今が始めてであった。博士が、自分の生命をうちこんで完成した器械というのは、人造人間の発明のことであつたか。「ふうん、大したものだ」

私は、むさぼるように、十八枚からなるその設計図を、いくどもくりかえして眺め<sup>なが</sup>入った。じつに、巧妙をきわめた設計図である。しかも、この人造人間は、新兵器として作られてあることが分つてきて、私は二<sup>に</sup>重<sup>じゆう</sup>におどろかされた。モール博士は、ベルギーの国防のために、このような大発明を完成したのであろうが、ドイツ軍のキャタピラにふみにじられた今となつては、手おくれ

の形となつてしまつたことを、私は博士のために気の毒にもおもひ、またベルギー国のためにも、惜しんだのであつた。

「千吉。もういいでしょう。その図面を、早くおしまいなさいな」と、ニーナが、私にさいそくをした。

「なぜ？」

私の眼は、なおも図面のうえに、釘づけくぎになつたままで、ニーナにといかえした。

「おや、これはなんだ。えらいものを、みつけたぞ。ははあ、そうか」

ニーナが、図面を早くしまえといつたわけが、急にはつきりしたのであつた。それは、外ほかでもない。図面の四隅よすみに、小さい穴が

あいているのを発見したのだ。

「わかった。誰か、この図面を、写真にとったのだ。ニーナ、誰が、そんなことをしたのだ、おしえたまえ」

ひとの知らないうちに、この貴重な図面を写真にとってしまうなんて、ひどい奴があつたものである。

ニーナは、もう仕方がないという顔つきで、

「千吉、あまり大きいこえを出さない方がいいわ。一体、ここを、どこだとおもっていらつしやるの」

私は、ニーナのことばに、あらためて、びっくりしなければならなかった。

そうだ、ここは一体、どこなのだろう。さつき、目がさめたと



きから、今までに見たことのない、ふしぎな場所にいるわいと、  
気になってはいたのだが……。

「ニーナ。ここは、一体どこかね」

私は、ニーナのへんじをきいて、びっくりしなければいいがと  
思った。

「ここはね、たいへんなところなのよ」

と、ニーナは、うつくしい眼を大きくひらいて、ぐるっと、あ  
たりをみまわし、

「ここはね、ドイツ軍に属する秘密の、地下工場なのよ」

「ええっ！」

私は、やっぱり、びっくりしてしまった。

地下工場ちかこうじょうの捕虜ほりよ

まさか私は、ドイツ軍に属する秘密の地下工場の中にいようとは、気がつかなかつた。

なぜ私は、そんな工場の中に、かつぎこまれたのであろう。わからない、全くわからない謎だ。

だが、その謎は、ニーナが、といてくれた。ここは、同じくベルギーの国内であつて、ベントンネル隧道の中であるそうなの。ベン隧道というのは、ベン山腹の下を、くりぬいていて、そこを通る電車は、国境線の内側三十マイルの線にそつて走っているが、五年前

に出来、あまり乗客のない郊外電車であった。ドイツは、そのベン隧道の下に、ひそかに、地下工場を作つてあつたのだ。そもそも、あまり乗客のないベン鉄道を作つたのも、ドイツの国防計画の一つであつたかもしれない。

そういえば、このベン隧道について、へんな噂をきいたこともあつた。なんでもそれは、ベン隧道の怪談という風にいいふらされたが、たとえば、こんなことがあつたというのだ。私たちのいた街の方から、ベン隧道の中に、十本の貨物列車が入つていくのを数えた人があるのに、隧道を出た向こうの踏切番は、いや十本の貨物列車なんて、うそだ。八本だといって、きかないのであつた。二本の貨物列車は、どこへ行ってしまったか、姿も影もない

のだ。そこで幽霊貨物列車の怪談が生まれ、この鉄道は、いよいよ乗客の数が減っていったのであった。今にして思えば、その二本の貨物列車こそは、ベン隧道の下に、地下工場をつくる材料をうんと積んで、地下へもぐりこんでしまったのであろう。おどろくべきドイツ軍の計画であった。いわゆる第五列の人々が、この地下工事にたずさわり、そして今も、その第五列の人々が、工場内で働いているのではなからうか。

「私は、イルシだんきゆう段丘の灯台の灯を目あてに、どんどん歩いて行っただがねえ。今からしてベン隧道の中にいるとは、だいぶん方角がちがったものだ」

というと、ニーナは首をふって、

「昨夜、町から見えた灯は、イルシ段丘の灯台の灯ではないのよ。このベン隧道のうえに点<sup>つ</sup>いていた灯よ」

「だって、ベン隧道のうえに、灯が点く設備があるなどということ、きいたことがない」

「わかっているじやありませんか。このベン隧道の下には、どこに国の人々が働いているかを考えれば……」

ニーナは、なまいきな口をきく。やっぱり、ドイツ軍に属する第五列のスパイの手によつて、昨夜、ベン隧道のうえに、あのまぎらわしい灯火<sup>とうか</sup>が点けられ、そして私は、まんまとそれにあざむかれて、こつちへまよいこんだのであろう。

「で、私は、だれに、助けられたのかね。君かね、ニーナ」

「あたしじゃないわ」

「じゃあ、誰？」

「フリッツ大尉た、い、いよ」

「フリッツ大尉って、誰だい」

そういつているところへ、うしろの扉が、ぎいーつと開いた。

「あ、フリッツ大尉よ」

ニーナが、私の横よこ腹ばらをついた。私は、フリッツ大尉の、いか

めしい軍服姿に、すっかり気をうばわれてしまった。

「おう、どうだ、君の傷のいたみは？」

「ええ、大して痛みません」

「そうか、痛みでしたら、またいいたまえ。注射をうってあげよ

う」

フリッツ大尉が、傷の手あてのことまで、やってくれたものらしい。

「ところで、君は、なにこくじん何国人かね。ニーナには、よく分らないらしい」

「中、中国人です。センという姓です」

私は、うそをいった。

「なんだ、中国人か。ふふん、やっぱり中国人だったかと、フリッツ大尉は、失望したような口ぶりだった。

「おい、セン。お前は、モール博士と知り合いなのか」

「いいえ、知りませんなあ、モール博士などという人は」

私は、つづいて、うそをいった。身の安全のためには、博士との関係をいわない方がいいと思ったからだ。なぜと行って、博士は、あれほどドイツおよびドイツ軍をきらっていたから。

「じゃ聞くが、あの黒い筒は、どうしたのか。お前の持っていた筒のことだよ」

フリッツ大尉は、私を睨みすえるように、いった。

（ははあ、大尉が、筒をあけて、あの中身を、写真にとってしまったんだな）

と、私は、はじめて知った。

「あの筒は、拾ったものです。なんだか、いいものが入っているように思ったので、持っていたのです」



私は、またもや、うそをいった。そういうより、仕方がないではないか。

「ふふん。まあ、そうしておいてもいいと……」

が、フリッツ大尉は、拳こぶしで、自分の背中をほとんど叩たたきながら、

「とにかく、あの人造人間の設計図は、モール博士の研究したものであることは、たしかだ。余は、あの設計図を写真にうつして、本国政府へ報告した。その返事があって、モール博士の研究であることが、はつきりしたのだ。お前が、それを認めようが認めまいが、余等よらのやることに、くるいはない」

と、大尉は、自信ありげにいつて、気をひくように私の顔をみ

た。

大尉は、私を験ためしているのだ。大尉は、私から、モール博士のことを、もつといういろいろ知りたいたのであろう。

「ところで、この工場では、あの十八枚の図面を基もととして、すでに人造人間の製造を始めているんだ。お前に、それを見せたいと思う」

大尉は、とつぜんおどろくべきことをいいだした。

電でん波ぱ操そう縦じゆう

私は、どうにかして、圧倒せられまいと、自分の心を叱しかりつけ

だが、そのようにはいかなかった。フリッツ大尉の案内により、  
おおじかけ  
大仕掛な地下工場のまん中に立ち、呻る廻転機や、響く圧  
くづち  
搾槌の音を聞いていると、ドイツ人のもつ科学力に魅せられて、  
おそろしくなってくるのだ。

私が今、見ている機械は、しきりに原型をうち出している。  
原型は、普通は、かたい鋼鉄でつくるが、この地下工場では、  
こうてつ  
私の知らない灰色のセメントのような妙な粉末を溶かして固める  
と  
かた  
のであった。

「どうだね、セン。君の気に入るように、製造工程は進んでいる  
かね」

フリッツ大尉は、私の気をひいた。

「さあ。おつしやることが、私には、すこしも分りません」

私は、すばらしい製造工程の進行についてのおどろきを、ひたかくしに、かくしていった。ドイツ技術なればこそである。

おびただ夥しい数の原型が、どんどんつくられていく。一体、そんなにたくさんの人造人間を作つてどうするつもりなのであろう。

「おう、セン。こつちへ来たまえ。いよいよ出来あがった製品について、試験が始まる。君は人造人間の出来具合ぐあいについて、遠慮なく、批評をしてくれたまえ」

フリッツ大尉は、そういつて、私をエレベーターにのせて、別室へつれて行つた。それは、三階ぐらい上のところにある部屋だった。この地下工場は、どこまで大きいのであろう。

廊下をちよつと歩いたところに、入口があつた。大尉は、扉を押して開いた。そして私の背中を、うしろからついた。

私は、全く気をのまれてしまった形だつた。なぜといつて、扉がひらいての瞬間から、私の眼は、室内に軍隊のように整列しているぴかぴかの人造人間のすばらしい群像に吸すいつけられてしまつたのだ。

なんとというりつぱなモール博士の研究であろう！

それとともに、なんとという手際のいいドイツ軍の製造技術であろう！

「さあ、あの台のうえにある金属製の檻の中に入って見物しよう」  
大講堂を十個ぐらいうち貫つらぬいたようなこの広い試験室の中央に

は、噴水塔ふんすいとうのようなものがあって、上は、金属棒をくみあわせ  
た檻かぎになつていた。そして、その檻の中には、試験官らしいドイ  
ツ人が三四人入つていて、机の形をした配電盤の前に立っている。  
人造人間をうごかすためには、強烈な電波を使うから、電波の侵  
入をふせぐこのようなげんじゆう厳重げんじゆうな檻の中に入つて試験をしなければ  
ならないのであつた。

フリッツ大尉と私とは、最後に、檻の中の人となつて、扉を閉  
じた。

檻の中から、整列している人造人間の部隊を見下ろしたところ  
は、奇観きかんであつた。なんだか人造人間の部隊のために、あべこべ  
にわれわれが檻の中に閉じこめられてしまったような錯覚さつかくをお

こした。それほど、人造人間部隊はいかめしい。

そのとき私は、丁度向こう側に、大きな箱のようなものがあるの、何だろうか、いぶかった。

「あの箱みたいなものは、何ですか」

と、私は、フリッツ大尉にたずねた。

「おや、お前は、勝手なときに、口をきくんだなあ。あの小屋のことが知りたいのかね。見ていれば、今にわかるよ」

そういう捨てて、フリッツ大尉は、右手をあげた。それは、試験始めの合図あいずであつた。一人の技師が、配電盤のうえについているスイッチを、ぱちりと入れ、そして計器の表をみながら、ハンドルをまわした。他の一人が、九千五百、一万……と、しきりに

数字を読みあげる。

「右向け、右！」

フリッツ大尉が叫ぶと、もう一人の技士が、配電盤上のタイプライターのキイのように並んだ釦ボタンを、ぽんぽんぽんと叩いた。とたんに、人造人間は、一せいに右へ向いた。生きている軍隊よりもあざやかに、まるで、珠算しゆざんのたまが、一せいに落ちるようであつた。

「四列縦隊で、前へ！」

ぽんぽんぽんと、また、別なキイが、技師の手によつて、叩かれる。

かつつと、金属製の靴が鳴ったかと思うと、すぐさま四列縦じゆう



隊たいが出来、ついで、この縦隊はすつすつと、小きぎみな足あ取しどりで歩きだした。生きている兵士の二倍ぐらいの速さである。

「全速ぜんそく、駈かけ足あし、おい！」

ひゅーんと、妙な機械的な呻うなりがしたかと思うと、人造人間縦隊は、私たちの入っている指揮塔のまわりを、まるで、玩具おもちゃの列車のように、隊伍整然たいごせいぜんと、そして目がまわるほどの速さでまわりだした。生きている人間が、こんな速さで走ったら、目がまわったうえ、心臓破裂で死んでしまうだろう。

フリッツ大尉は、それに引きつづいて、いろいろな号令をかけた。人造人間は、まるで人間とかわらぬ運動をした。どんな複雑な号令をかけても、配電盤のキイの叩たたき方によって、ちゃんと別

々にうごくのであった。そして人造人間の兵士の行動は、どこまでも正しくあり、そしてどこまでも勇敢であった。

そうであろう、機械人間であるから、死をおそれる神経がないのであるから。

大尉は、ときどき私の顔色をうかがった。だが私は、そしらぬ顔をして、立っていた。大尉の調練ちようれんは、三十分で終わった。

「もういいだろう。モール博士の作った人造人間は、思いの外ほか、すぐれた働きをするものだわい」

大尉は、技師たちに、休めを号令した。そして汗をふいた。私も汗をふいた。まった全く、博士の研究の偉大なおどろくほかはない。こういう立派な機械の設計図を、まんまとフリッツ大尉の

手に渡してしまったことが、たいへん残念であった。私は、深い後悔こうかいにおちた。

まわ  
廻らぬ齒車はぐるま

大尉が、汗をぬぐい終らぬうちに、指揮塔の向こうに見えてい  
る箱の横に、ぽつかりと扉が開いて、中から一人の技師が、とび  
だしてきた。

「フリッツ大尉。これは、どうもへんですぞ」  
と、彼は、大きなこえで、どなった。

大尉は、びつくりしたような顔になって、箱の中にひそんでい

た技師を、そばによびよせ、

「なにが、へんだ」

と、きいた。

「なにがつて、エツキス光線で、今の人造人間の腹の中をみていたのですが、腹の中にあるたくさんの歯車のうちで、ついに一度もまわらなかつた歯車が二個ありました。へんじやありませんか」

技師は、熱心を面おもてにあらわしていった。

「まわらない歯車が二個もあつたか。どうしたわけだろう」

と、大尉は私の顔を、じろりと睨にらんだ。

だが、何を、私が知っているものか。

「あらゆる号令は、かけてみたつもりだが、はて、へんだな」

と、大尉は、なおも解せぬ面持で、広い額を、とんとんと拳で叩いた。

「なぜだろうな、セン。説明したまえ」

「私が、なにを知っているものですか。あの筒の中に、こんなすばらしい設計図が入っていると知ったら、私は、あんなところにぐずぐずしていませんよ」

「ふしぎだ。が、まあ今日のところは、これでいいだろう」と、フリッツ大尉は、試験の終了を宣したのであった。

私たちは、檻を開いて、外に出たが、そのとき大尉は、私に向い、

「どうだね、セン。君は、捕虜として土木工事場で、まっ黒にな

って働きたいか、それとも、この工場で、見習技師みならいぎしとして、楽に暮りたいか」

と、たずねた。

「もちろん、楽な方がいいですなあ」

と、私は即座そくざに答えた。単に、楽を求めたわけではない。私は、見習技師としてでも何としてでも、この工場にとどまりたかったのである。それには、一つの望みがあった。それは、なんとかして、人造人間の設計図を、うばいかえしたいということだった。その日から、私は、この地下工場で、働くことになった。フリッツ大尉が、試験の結果、これならば大丈夫、戦場に出して充分役に立つことがわかったので、それからというもの、工場は、

全能力をあげて、人造人間の製造にかかったのである。

当時、大尉の計算によると、この工場で、一日のうちに、人造人間を五百人作ることが出来る。十日間頑張ると、五千人の人造人間部隊が出来るから、これをもつて、イギリス本土への上陸作戦が、うまくいくにちがいないと考えたのである。しかも、一人の人造人間は生きた人間の兵士の百人に匹敵し、五十万の英兵を迎え討つに充分であるというのだ。

私は、その夜のうちに、すべてを決行しようと、機会のくるのを、待っていた。私は、捕虜の身分であるので、例の藁のうえに寝た。ニーナも捕虜であるから、同じ部屋に寝るのだった。ニーナは、私に向かいいろいろと昼間の出来ごとを質問した。しかし

私は、一切、口を緘<sup>かん</sup>して、語るのをさけた。ニーナは、ついに腹を立てて、寝てしまった。

午前三時！

ついに、その時刻となった。私は、その時刻こそ、脱出するのに最上の機会だと思って狙っていたのだ。

「ニーナ、お起きよ」

私は、ニーナを、ゆすぶり起した。

ニーナは、びっくりして、藁の中から起きあがった。私が、脱出のことを話すと、ニーナはあまりだしぬけなので、俄<sup>にわ</sup>かに信じられない顔付だった。

「脱走なんて、そんなこと、出来るの」



「うん、出来るのだ。人造人間を使って、ここを脱のがれるんだ」

「ええ、人造人間？ そんなこと、出来るのかしら」

信じ切れないニーナを、ひったてるようにして、私は窓を破つて、廊下へ出た。もちろん私は、例の黒い筒を、背中にしっかりと背負って、両手は自由にしておいた。

「ドイツ兵に見つかったら、どうなさるの」

ニーナは、心配げに、たずねた。

「柔道で、投げとばすだけだ。柔道のことは、ニーナも知っているだろう」

と、私は、投げの形をして見せた。

「ああ柔道！ 知っている、あかし。日本人は、ピストルがなく

ても、敵とたたかえるのね。まあ、すばらしい」

その足で、私は、フリッツ大尉の部屋へ飛びこんだ。もちろん大尉は、ベッドの中で、ぐうぐういびきをかいて寝ていた。大尉の上衣が、壁にかかっている。私はそのポケットを探した。一ひとた束ばの鍵が、手にさわった。私は狂喜きょうきした。それこそ、あの人造人間の指揮塔の扉の鍵だったのである。私はニーナの手をとつて、階段づたいに、人造人間のいる三階へ、かけのぼって行つた。

ニーナは、その途中で、私に、こんなことをいった。

「なにもかも、お芝居のように、うまくいくのね。あんまり、うまくいきすぎると思うわ。それにしても、フリッツ大尉は、なんというだらしない人でしょう」

ニーナは、あきれている。私とて、じつはこううまくいくとは思っていないかったのだ。脱出方法のことや、大尉が、無造作むぞうさにポケットになげこんだ指揮塔の鍵束かぎたばのことなどは、ちやんとしらべてあったのだが、それにしても、こううまくいくとは思いがけなかった。廊下にも階段にも、歩哨ほしやう一人、立っていないのだ。私たちは、らくに、指揮塔の中に忍びこむことが出来た。

「これからどうなさるの」

「これから、人造人間の背中に、おんぶされて、ここを脱出するのだ」

「まあ、そんなことが、ほんとに出来るかしら」

ニーナは、目を丸くしている。

脱出  
だっしゅつ

「わけなしだ。ニーナ、見ているがいい」

私は、指揮塔の、配電盤のキイを、ぽんぽんぽんと押した。

その次の瞬間、私は人造人間が、がちやんがちやんと音をたて、こつちへ歩いてくるのを予想していた。ところが、そうはいかなかつた。場内に並んだ人造人間は、林のように、しずまっっている。

「へんだなあ」

「それごらんなさい。人造人間は、うごかないじゃありませんか」

「そんなはずはないんだが……今押した人造人間は、故障かもしれない。他の人造人間をうごかしてみよう」

私は、別なキイを押した。ところが、やはり駄目だった。人造人間は、うごかない。私は、焦<sup>あせ</sup>ってきた。そこで、私は最後の試みとして、あらゆるキイを押して、そこに並んでいる人造人間のすべてをうごかすように試みた。すると、ふしぎにも、最後にキイを押した三人の人造人間が列をはなれて、指揮塔内に入ってきた。私は、涙が出るほど、うれしかった。

「ニーナ、やっぱり、うごいたよ。三人うごいてくれれば、こっちの思う壺だ。さあ君は、この人造人間の背中におのりよ。私は、こっちののに、のる」

私は、よろこび勇<sup>いさ</sup>んで、ニーナを、人造人間の背中に、のせてやった。ニーナは、妙な顔をして、

「人造人間を、三人も呼んで、どうなさるの。あたしたち二人をのせて脱出するのだったら、二人でたくさんじゃない。一人、あまるわ」

「そうじゃないんだ。どうしても、三人の人造人間が必要なんだ。のこりの一人の人造人間がたいへん大事な役をするんだ。見ていなさい、今すぐに分る」

私は、こういって、第二番目の人造人間の背中にのつた。そして背中のうえから、腕をのばして、キイをポンと押した。

すると、第三番目の人造人間が、つかつかと、配電盤の前へ歩

いて行って、すぐその前まで私が占めていた位置についた。そしてその人造人間が、私に代って、キイを、ぽんぽんぽんと押したのであった。

「ニーナ、走り出すから、しっかりつかまえて……………」

言下げんかに、私たちを背負った二人の人造人間は、うごきだした。

そして指揮塔の出入口から出ていった。

「出発から、破壊から、疾走から、それから国境越えまで、なにからなにまで、私が計画したとおり、配電盤の前に残っているあの人造人間が、順序正しくやってくれるんだ。まあ、見ているがいい」

私は、得意だった。ニーナと私をのせた人造人間は、肩を並べ

て、すつすつすつと歩きだした。そして階段をもう一階、上にもぼると、たいへんな力を出して、扉を押しおし、外へ出た。そこにはひとすじ一条のりっぱな地下道がついていた。人造人間は、そのうえを、走りだした。だんだんスピードがあがってきて、風がひゆうひゆう鳴りだした。

「ニーナ、おちないように、人造人間の背中に、しがみついているんだ！」

「ええ」

人造人間は、砲弾ほうだんのように走る。

あつという間に、衛兵所えいへいじよの前を通りすぎた。そして地下道から外に出た。草の匂においが、ふうんとした。二人の人造人間は、な



おも肩を並べ、風を切つて走りいく。

(どうも、あんまりうまくいきすぎたようだ)

私は、人造人間を利用したこの脱出計画が、あまりにうまくいきすぎて、うれしくもあつたが、意外な感がしなくてもなかつた。それにしても、衛兵えいへいが発砲するでもなし、誰かが後を追いかけてくるでもなし、全く意外なことだらけであつた。

一時間ばかりすると、夜が白々しろじらと明けていった。心も感情もない人造人間に背負せおわれて、どんどん広野こうやを逃げていく私たちの恰好は、全くすさまじいものに見えた。とにかく、この勢いきおいで、あと一時間ばかり走らなければならぬが、途中とちゆう、ベルギー兵かフランス兵にとがめられたとすると、人造人間にのつた私たち

は、化物かスパイ扱いにされて、誤解をまねくおそれがある。そんなことも、新しい心配になって、私の頭をつかれさせた。

ニーナも、死人しにんのように、青ざめた顔をしている。彼女は、大きな眼をあいて、不安げに、しきりに、あたりを見まわしている。そのニーナが、とつぜん私をよんだ。

「ねえ、私たちの前を、へんな自動車が走って行くわよ。髯ひげもじやの紳士が、のつていて、はんしやきよう反射鏡で、しきりに、こつちをみているわ」

「えっ、そんな奴が、前にいたか」

私は、うしろばかり注意していたので、この先駆者せんくしやには、気がつかなかったのだった。なるほど、前方五百メートルのところ

を、たしかに、私たちと同じようなスピードで、街道を走って行く無蓋自動車むがいがあつた。

その自動車のうえから、とつぜん、ぴかぴかと、眩まぶしい光線が、閃ひらめいた。なにかの信号のように。

すると、どうしたわけか、私たちののついていた人造人間のスピードが、急におちて、おやへんだと思つているうちに、ぴつたりと、道路のうえに、停とまつてしまった。

「こんなはずはない。私は、国境附近に達するまで、人造人間を、全速力で走りつづけさせることにしてきたのに……」

と、私は、人造人間が、急に停つてしまったことに、大不審だいふしんをもつた。

「おい、千吉せんきちじゃないか」

太い声が、私をよんだ。

私は、前を見た。いつの間にか、例の怪自動車が、私たちの前に停っていた。そして、車しゃ上じょうからこつちを向いている髯ひげもじやの顔！

「おお、モール博士じゃありませんか。これはおどろいた」

ふしぎな再会さいかい

モール博士と、行きあつたのだ。ふしぎなところで、一緒になつたものだ。

「おどろいたのは、わしの方のことだ。君はいつの間に、あの黒い筒の中に入れておいた設計図を使つて、こんな人造人間を作りあげたのかね」

博士は、車上から、こわい顔をして、私たちを睨にらみつけた。

そういわれると、私は一言もない。私は、もう仕方がないと思つたので、こうなつたわけを手短かに、博士に報告した。

博士は、私の一語一語に、顔を赤くして、ドイツ軍を呪のろつていた。しかし、私に対しては、思ほかいの外、不快に思っていないらしい。

「博士。でも、へんですな」

「なにが、へんだ」

「でも、私は、この人造人間が、私たちを国境附近へつくまでには、全速力で走るように、ちゃんと器械を合わせて来たのに、ここで停ってしまったのは、どういうわけでしょうか」

「なんだ、そんなことか。それは造作ないことさ。<sup>ぞうさ</sup>ふふふふ」

博士は、奇妙なこえをあげて、笑った。

「造作ないとは？」

「つまり、わしが停めたのさ。発明者であるわたしには、あの設計によるA型人造人間を停めることなんか、わけはないのだ。<sup>さいわ</sup>幸いに、その器械をつんだ自動車が、あそこにああして、こわれずに、ちやんとしているんだ」

と、博士は得意そうにいった。

なるほど、これは道理どうりである。この人造人間がA型という名の  
ついているものであることは始めてしつたが、そのA型人造人間  
の発明者であるモール博士が、それを停めたり、また走らせたり  
する器械をもっているのは、ふしぎなことではない。

「そんなことは、なんでもないが、ベントンネル隧道の下の、ドイツ軍  
の秘密の地下工場で、早速さつそくこのようなりつぱな実物じつぶつをつくり  
あげてしまったことは、腹も立つが、なんとおどろくべき、製造  
力だろう」

と、さすがの博士も、舌をまいた。

「博士はこれから、どうされるのですか」

「わしかね。わしは、やはり国境を越えて、フランスに入るつも

りだ。君にあつて、たいへんうれしいが、あと、ハンスのことが  
気がかりだが、仕方があるまい。では、君たち、わしの自動車に、  
一緒にのつたがよい」

博士は、車上から手招きてまねをした。

ニーナは、さつきから、道傍みちばたに身体をなげだして、死んだよ  
うになつて、疲れを休めていたが、これを聞くと、むくむくと起  
きあがつて、博士の自動車の方へ、よろめき歩いて行つた。私も、  
ニーナにならうより外はない。しかし、この人造人間を、このま  
まにしておくのは、たいへん勿体もったいないことだと思つたので、

「博士、この人造人間は、どうしますか」  
と、たずねた。



博士は、車上にかがんで、受話器を耳にあてて、何かの音を聞いていたが、このとき髯ひげもじやの顔をあげ、

「この人造人間は、ここで片づけていく」

「片づけていくとは……」

「なあに、壊こわしていくのさ」

「そんなことが出来るのですか」

「出来るとも。わしが設計したんだもの。しかもこのA型人造人間も、ハンスの持っているB型人造人間も、じつはどっちも、不完全なんだから、こわすのは、わけなしだ」

博士は、妙なことをいいだした。

「不完全ですって。なにが、不完全なんですか」

「そのわけは、ちよつと簡単にいえない。が、要するに、ちよつとやれば、すぐ壊れてしまうようなものは、不完全の証拠だ。  
わしは……」

といいかけた博士は、そこで急にことばをきつて、熱心に受話器から流れ出す音をきき始めた。

「おお、そうか。いよいよやって来たか」

「やって来た？　なにがやって来たのです」

「人造人間部隊の襲来だ。おそらく、お前たちが出発してすぐその後から、ドイツ軍がくりだしたものだろう。おお、見える見える。もうあそこまで来た。畜生、わしのを失敬して、わしを攻めるとは、けしからんだドイツ軍だ。だが、今に見ておれ」

博士は、かずかずの呪いのろのことばを、地平線のあなたに投げつけた。はるかうしろの、もうすっかり明け放れた地平線上には、いつの間に追いついたのか、三四百人の人造人間部隊が、肩を揃え、顔を並べて、大河の流れのように、こつちへ押しよせてくるのであった。

「あつ、撃った」

「えっ」

「人造人間の腕に仕掛けてある機銃きじゆうが、一せいにこつちに向いて、撃ちだしたぞ」

だだだん、だだだん、だだだん。

ものすごい銃声だ。銃弾は、ひゅーン、ひゅーンと、呻うなりごえ

をあげて、私たちのまわりにとんで来る。私は、博士にうながされて、いそいで自動車上の人となった。

「見ていろ、千吉。今あの人造人間部隊を、一時にぶつつぶしてみらから」

博士は、しわがれたこえで叫ぶと、車上の器械のスイッチを入れて、<sup>ボタン</sup>鉦をぽんぽんと押した。

「あれ、見よ！」

轟<sup>ごうぜん</sup>然たる音が、人造人間部隊の中から、起った。私は、今ま

でに、こんな痛快な光景をみたことがない。一瞬のうちに、人造人間部隊は、ばらばらになって、空中に飛び散ってしまったのである。その有<sup>ありさま</sup>様は、飛行機の空中分解と、あまりかわらなかつ

たが、しかし、これは、何百というA型人造人間が、一せいに分解して飛び散ったのであるから、その壯観そうかんな光景といったら、なんと行ってあらわしたがいいか、見当がつかないほどだ。

ドイツ軍が、人造人間で追撃させたことも、博士のために、無駄に終わった。

だいあくにん  
大悪人だ

「さあ、この隙すきに、国境まで急行しよう」

博士は、自動車のハンドルをとった。私たちの乗った車は、空中にまい上ったA型人造人間の破片はへんが、まだ地上におちない先に、

国境向けて、疾走しつそうを始めたのであった。

「向うに見えるあの丘陵きゆうりょうを越えれば、国境は目の下に見えるのだ。あと七八十キロ！」

博士は、元気なこえで言った。

私たちの自動車が、丁度丘陵の下までやって来たときに、博士はなに思ったか、

「あっ！」

と叫んで、大急ぎで、ブレーキをかけた。

「どうしたのですか、モール博士」

と、私は、博士の背中越せなかごしにこえをかけた。

「また、人造人間部隊が現われた。あれを見ろ、行手の丘陵の上

から、こつちへ向かつて下りてくる」

なるほど、博士の目は早い。教会の垣根のように、整然と並んで、人造人間と思われる部隊が、例のすり足の行進で、ぎくぎくと、こつちへ向かつてくるのであった。

博士は、車を停めると、そうがんきよう双眼鏡をとりだして、あらて新手の人造人間部隊をじつと睨にらんでいたが、

「おお、うしろに、ハンスがいるではないか。あいつ、ドイツ軍のまわし者だったんだな。ち、畜生！」

ハンス？ 私は、双眼鏡をもっていなかったもので、博士のように、ハンスの顔を、はつきり認めることが出来なかったが、しかし丘陵を駆け下ってくる人造人間部隊の一番後方に、一台の快速

戦車があつて、その掩蓋えんがいから、一人の将校が、首から上を出して、人造人間部隊を指揮しているらしいのが見えたが、多分それがハンスなのであらうと思つた。

「おお、ハンス奴め。ナチスの旗を立てている。なに、モール博士、降服しろと信号を送っているぞ。な、なまいきな奴だ」

博士は、かんかんになつて怒りだした。そして、一層いつそう早口はやくちになつて、ハンスを呪いだした。

「おい、ハンス。お前は、わしの持つていたB型人造人間の設計図をつかつて、その人造人間部隊を作りあげたのじやろう。双眼鏡で見ると、お前はたいへん得意らしい顔つきだが、B型人造人間なんて、A型人造人間同様に、不完全なんだ。見ていろ。わし



が、この釦ボタンを押せば、その瞬間に、せつかくの人造人間部隊が、ばらばらになって空中に吹きとんでしまふんだ。さあ一つ、その豪華な爆発作業を見せてやるかな」

と、遠くにいるハンスに向つて、モール博士は、さんざんの憎まれ口をきいたうえ、例のスイッチを入れ、そして指先に力を入れて、B型人造人間が爆発分解する釦を、ぽつと押したのであつた。

「おやツ！」

叫んだのは、モール博士だ。予期した爆発が、起らないのであつた。人造人間部隊は、あいかわらず整然と隊伍たいごをととのえて、丘を下りて、こつちへやってくる。

モール博士は、狼<sup>ろうばい</sup>狽<sup>ばい</sup>の色を、かくそうともしなかつた。彼は、二度、三度……いや七度八度と、爆破の釦を押した。

だが、爆発は、いつまでたつても、起らないのであつた。

“どうです、モール博士。悪いことは出来ない、始めて知りま  
したか”

と、車上につけてあつたラジオの高声器から、とつぜんハンス  
のこえが、大きく聞えてきた。

“私の操<sup>そうじゆう</sup>縦<sup>じゆう</sup>する人造人間部隊を、いくら博士の器械で爆破し  
ようと思つても、それはだめです。これは、博士の望んでいらら  
るようなB型人造人間ではないのです”

うむ——と、博士はハンスの声に対して呻<sup>うな</sup>りごえをあげた。

“あの図面の秘密はもうちゃんとわかってしまいましたよ。千吉のもっていったA型の図面だけでもすぐこれは不完全な人造人間が出来るし。私のもっていったB型の図面だけでも、同様に不完全な人造人間が出来る。——そうでしょう。だから、完全な人造人間をつくるにはA型とB型との両図面をどっちも二つに折って半分ずつつぎあわせたうえで、そのつぎはぎ図面によつて作ればいいのです。ねえ、博士、そのとおりでしょう”

“博士。いまこの丘陵を下りつつある人造人間はその完全な人造人間部隊なんですよ。そして間もなく、博士を逮捕してしまうでしょう。もう覚悟をされたい”

ハンスが号令を下すと、人造人間部隊は、だんがん弾丸のように丘を

かけ下つて、博士を包囲してしまった。博士は、大ぜいの人造人間に、胴あげにされたまま、ハンスの前につれてこられた。

私は、あまり意外なこの場の出来ごとに、すっかり気をのまれていたが、このときようやくわれにかえつて、車をおりるとーナと共に、ハンスの前へ近づいた。

「これは一体どうしたわけかね、ハンス」

私は、聞きたくて仕方がないことを、ぶつつけて尋ねた。

「うん、君は、びっくりしたろう。しかし、わけは、簡単なんだ。このモール博士というのは、もと、われわれの祖国ドイツにいた科学者だ。博士は、ナチスのため祖国を追われて、このベルギーへ移つたが、そのとき、モール博士とどうりよう同僚どうりようだった私の父、す

なわちヘルマン博士の秘密研究をうばって、逃げてしまったんだ。しかも私の父は、モール博士のために毒を盛られ、とつぜん心臓しんぞ麻痺うまひで倒れてしまったので、博士のやった悪事が、永い間、わからなかつたのだ。でも、ドイツ官憲の、懸命な捜索そうさくから、モール博士の所在しよざいがわかり、私は、身分をかくして博士の門下となり、盗まれた秘密の研究を、とりかえそうと、くるしい努力をしていたのだ。君か私かのどっちかが、どうかなくなってしまえば、図面が半端はんぱになり折角せつかくの苦心も水の泡あわになったところだ。だがA型人造人間をエツキス光線でしらべて、廻らない二つの歯車があるところから君の持っていたあの図面だけでは、完全な人造人間が出来ないことを推論すいろんしたフリッツ大尉は、私以上の殊勲者だ。

君を、わざと逃がして、その行手に、モール博士が待っていることをいいあてたのは、もちろん私だが、こうもうまくいくとは思わなかった。とにかく、父ののこした貴重な研究を、とり戻して、こんなうれしいことはない」

そういつて、ハンス少尉は、私とニーナの手を、かわるがわる、つよく握ったのであった。ハンスの父ヘルマン博士の研究による完全人造人間の部隊は、いずれそのうち、はむか 歐洲戦線のどこかに、必ず姿をあらわして、ドイツ軍に刃向う敵軍を、徹底的に圧迫するにちがいない。







# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第1巻 地球要塞」三二書房

1990（平成2）年4月30日第1版第1刷発行

初出：「小学六年生」

1940（昭和15）年8月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力…tatsuki

校正…kazuishi

2006年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 人造人間の秘密

海野十三

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>